マナビエ
MANABIE

記述の設計図　第4部 4つの型

U11　まとめ・対比型（共通点・違い・変化）

アドバンス

対象：高校2年・偏差値50

1. 要点（ルール）
2. 例題　評論「二つの時間」
3. 練習1・練習2（解答らんつき）
4. 解答と採点表

要点　まとめ・対比型のルール

R11-1　3類型の判別
共通点・相違点・変化（推移）のどれを問うかを設問末尾で決める。「どのように違うか」「どう変わったか」「共通するのはどのような点か」。

R11-2　まとめの部分から
具体例ではなく、具体例を抽象化した部分から答えを作る。「つまり」「このように」の後がまとめであることが多い（傾向）。まとめが無ければ、具体例に共通する性質を自分で抽象化する。まとめと具体例を読み合わせて、ずれを確かめる。

R11-3　対比は同じ観点で
相違・変化は、同じ観点について反対の語を向かい合わせる（「AはXだが、BはYだ」）。観点がずれた対比は、対比として採点されない。

R11-4　共通点は両方に当てはめる
共通点の候補をAとBの両方に当てはめて確かめる。片方にしか言えない要素は入れない。

R11-5　変化は前→きっかけ→後
変化は、前の状態・変化の原因・後の状態の三点で書く。前後は反対の語で対比させる。根拠のない要素は入れない。

R11-6　文末と採点表
中身の点検が先、文末は最後。要素ごとに配点がある。字数超過は採点対象外になることが多い。

R11-7　観点をそろえ、価値づけは本文で決める
観点を先に一覧にしてから、各観点のA・Bを埋める。「プラスに書かれた側が筆者の主張」は傾向であって規則ではない（両方の価値を認める文章・マイナスの側の良さを言う文章がある）。筆者の評価は本文の言葉で決める。要約は対比の軸（何と何をくらべる文章か）で組む。

ルールの番号（R11-〇）は、講座全体の通し番号です。動画・Webページ・このPDFで同じ番号を使っています。

例題　評論「二つの時間」

① 私たちの一日は、時計によって区切られている。七時に起き、八時半に授業がはじまり、十二時に昼食をとる。時計の時間は、だれにとっても同じ速さで進み、一時間はいつどこで測っても一時間である。だからこそ、離れた場所にいる人どうしが、同じ時刻に集まることができる。

② 時計の時間の特徴は、それが中身から切り離されていることだ。一時間のあいだに何をしたかに関係なく、一時間は一時間として数えられる。数えられるから、時間は分けたり、くらべたり、売り買いしたりできる。「時給」という言葉は、そのことをよく表している。

③ しかし、人が生きている時間は、それだけではない。パンの生地がふくらむまで、ことばにならない悲しみがやわらぐまで、子どもが自分で靴ひもを結べるようになるまで。こうした時間は、時計で決めることができない。そのことがおのずから熟すまで、付きあうしかない時間である。ここではそれを「ことの時間」と呼んでおこう。

④ ことの時間は、時計の時間とはちがって、伸びたり縮んだりする。同じ一時間でも、ある人には一瞬で、ある人には一日のように長い。また、ことの時間は、そのことから切り離せない。パンがふくらむ時間を、別の作業の時間ととりかえることはできないのである。

⑤ つまり、時計の時間は、だれのものでもない時間であり、ことの時間は、そのつど、だれかの、何かの時間である。前者は人を外から一斉に動かし、後者は人の内側の歩みに寄りそう。

⑥ 近代の社会は、時計の時間によって、多くの人の仕事を効率よく組みあわせることに成功した。だがその成功のかげで、ことの時間は「むだ」や「遅れ」として扱われがちになった。私たちに必要なのは、時計を捨てることではなく、時計ではかれない時間が生活のなかにあることを、思い出すことだろう。

問　――線部「前者は人を外から一斉に動かし、後者は人の内側の歩みに寄りそう」とあるが、「時計の時間」と「ことの時間」はどのように違うか。本文全体をふまえ、百字以内で説明せよ。

解き方

1. **手順1　類型と対比の軸**
   「どのように違うか」＝相違点(R11-1)。軸は「時計の時間 ⇔ ことの時間」。――線部の「前者」「後者」は指示語なので、まずそれぞれを特定する。
2. **手順2　観点を先に一覧にする(R11-7)**
   ①中身との関係(②④)②進み方(①④)③数えられるか・とりかえられるか(②④)④人との関わり(⑤)。各観点に、A(時計)とB(こと)を埋める。
3. **手順3　具体例を外す**
   七時・時給・パン・靴ひもは具体例。⑤段落「つまり」のあとがまとめ。まとめと具体例を読み合わせ、「だれのものでもない⇔だれかの、何かの」が②④と合うことを確かめる(R11-2)。

4. **手順4　筆者の評価は本文で決める**

⑥段落は「時計を捨てることではなく」。ことの時間の側に重みを置きながら、時計の時間の成功も認めている。「時計の時間は悪い」と書くと本文とずれる（R11-7＝プラスの側が主張、は傾向）。

5. **手順5　字数で観点の数を決める**

六十字なら④（人との関わり）＋①（中身から切り離されるか）。百字なら②③まで。どの観点も「AはX、BはY」と同じ順で向かい合わせる。

要素表（材料を集める）

要素	中身	根拠	入れる？
観点①　中身との関係	時計＝中身から切り離されている ⇔ こと＝そのことから切り離せない	②④	◎ 入れる
観点②　進み方	時計＝だれにも同じ速さ ⇔ こと＝伸びたり縮んだりする	①④	◎ 百字なら入れる
観点③　数える	時計＝数えて分け・とりかえられる ⇔ こと＝熟すまで付きあうしかない	②③	○ 入れる
観点④　人との関わり	時計＝人を外から一斉に動かす ⇔ こと＝人の内側の歩みに寄りそう	⑤	◎ 入れる
具体例	七時・時給／パン・悲しみ・靴ひも	①②③	× そのまま書かない
本文とずれる評価	時計の時間は悪いものだ	なし（⑥と矛盾）	× 入れない

模範解答

模範解答（百字以内）　94字／100字以内

時計の時間は中身から切り離されてだれにも同じ速さで進み、数えられて人を外から一斉に動かすが、ことの時間はそのことから切り離せず伸び縮みし、熟すまで付きあうしかなく人の内側の歩みに寄りそう。

参考：六十字以内なら　56字／60字以内

時計の時間は中身から切り離されて人を外から一斉に動かすが、ことの時間はそのことと一体で人の内側の歩みに寄りそう。

採点表

採点表(要素ごとの配点)	点
人との関わり:外から一斉に動かす ⇔ 内側の歩みに寄りそう(前者・後者を特定して)	4点
中身との関係:中身から切り離される ⇔ そのことから切り離せない	3点
進み方・数え方:同じ速さで数えられる ⇔ 伸び縮みし熟すまで付きあう	2点
同じ観点で向かい合わせている・文末が整っている	1点
合計	**10点**

減点の型(こう書くと)	何点になる？ なぜ？
「前者は外から動かし、後者は内側に寄りそう。」	指示語のまま(前者・後者が何か不明)。――線部のくり返しで0点。
「時計の時間は七時や時給で、ことの時間はパンや靴ひもだ。」	具体例のまま。違いの説明になっていない。0点。
「時計の時間は数えられるが、ことの時間は人に寄りそう。」	観点がずれている(数え方 と 人との関わり)。それぞれ片側だけなので配点の半分以下。
「時計の時間は人を不幸にするが～」	本文に根拠が無い・⑥と矛盾。その部分は0点。
百一字以上	字数超過。採点対象外になることが多い。

練習1　評論「おすそわけの行方」

① 私が子どものころ、となりの家から、畑でとれた野菜がよく届いた。母はそのたびに礼を言い、何日かあとに、煮物を小鉢に入れて返しにいった。返された小鉢には、またべつの何かが入って戻ってきた。ものは、家と家のあいだを行ったり来たりしていた。

② こうしたやりとりでは、もらうことは、同時に「借り」をつくることでもあった。もらった側は、いつか何かを返さなければならない。返せば、相手もまた何かを返したくなる。ものの行き来が止まらないかぎり、二つの家の関係も切れることがなかった。贈り物は、人と人とを結びつづける糸のようなものだったのである。

③ いま、私たちは必要なものの多くを店で買う。代金を払えば、その場で取引は終わる。店員と客のあいだに借りは残らず、次に会う約束もない。だれとも言葉を交わさずに、買い物を終えることさえできる。買うという行為は、関係をその場で完結させるしくみだと言ってよい。

④ この変化を、ただ嘆くのはたやすい。しかし、借りのある関係は、ときに重荷でもあった。返さなければという気づかいは人を縛り、付きあいたくない相手とも縁を切れなくした。お金で買えることは、そうした負い目から人を自由にしたのである。

⑤ 店で買ったものには、だれかに返さなければならない理由がない。だから、ものが人と人とのあいだを行き来することもない。だが、そのかわりに、私たちは、ものを通じて他人とつながりつづける機会を失いつつある。自由になったはずの私たちが、ときに深い孤立を感じるのは、そのためではないだろうか。

⑥ 大切なのは、昔のやりとりに戻ることではない。借りを返し、また借りるという関係が、人を縛るだけでなく支えてもいたことを、もう一度考えてみることだろう。

問　――線部「ものを通じて他人とつながりつづける機会を失いつつある」とあるが、筆者は、ものの手に入れ方が変わったことで、人と人との関係がどのように変わったと述べているか。本文全体をふまえ、百二十字以内で説明せよ。

① 要素表を書こう

要素(観点・共通点・前と後)	中身	根拠の段落

② 答えを書こう

									10										20
									30										40
									50										60
									70										80
									90										100
									110										120

120字以内(1マスに1字。句読点も1字)

練習2　評論(要約)「そばにいるということ」

① 病院や介護の現場では、ケアはしばしば「何をしたか」で測られる。体温を測った、薬をわたした、体の向きを変えた。記録に残るのは、こうした行為の一覧である。行為は数えられ、くらべられ、改善することができる。それは、多くの人に必要な手当てを確実に届けるために、欠かせないしくみである。

② けれども、長く入院していた人に話を聞くと、心に残っているのは、そうした処置そのものではないことが多い。夜中に眠れずにいたとき、看護師が何も言わずに、しばらくベッドのわきに座っていてくれた。そのことを、十年たっても覚えている人がいる。

③ その看護師は、何かを「した」わけではない。ただ、そこに「いた」のである。にもかかわらず、その時間は、薬や処置とは別のしかたで、その人を支えた。自分は一人で放り出されてはいない、と感じられたからだ。困りごとが一つも減っていなくても、人は支えられることがある。

④ 「する」ケアは、相手の困りごとを見つけ、それを取りのぞこうとする。そこでは相手は、解決されるべき問題をかかえた人として現れる。一方、「いる」ケアは、困りごとが解決できないときにも続く。相手は、問題としてではなく、かけがえのない一人の人として、そこに受けとめられる。

⑤ 治らない病や、取りかえしのつかない喪失の前では、「する」ことは尽きてしまう。手をつくしたあとにも、そばに座ることはできる。そのとき最後まで残るのが、「いる」ことである。そう考えると、ケアの根には、「する」より先に「いる」があると言えるのではないか。

⑥ もちろん、「いる」だけでよいわけではない。必要な処置をおこたれば、それはケアではなく放置になる。大切なのは、「する」ことが、「いる」ことに支えられているのを忘れないことだろう。

問　――線部「ケアの根には、『する』より先に『いる』がある」とあるが、ケアについての筆者の考えを、「する」と「いる」の違いを明らかにして、百五十字以内で要約せよ。

① 要素表を書こう

要素(観点・共通点・前と後)	中身	根拠の段落

② 答えを書こう

10 20
30 40
50 60
70 80
90 100
110 120
130 140
150

150字以内(1マスに1字。句読点も1字)

解答と採点表

練習1　評論「おすそわけの行方」

解き方

1. **手順1　類型と三点**
   「どのように変わったか」＝変化（R11-5）。前（贈り物のやりとり）→きっかけ（店で買うようになった）→後（関係がその場で終わる）。

2. **手順2　前と後を同じ観点で**
   観点は「借り」と「関係の続き方」。前＝もらうと借りができ、返し合いが続いて関係が切れない（②）⇔ 後＝代金を払えば借りが残らず、関係がその場で完結する（③）。

3. **手順3　例外に気づく（R11-7）**
   ④段落「ただ嘆くのはたやすい。しかし」。筆者は昔の側だけをプラスにしていない。借りは重荷でもあり、買うことは負い目から人を自由にした。この面を落とすと、筆者の評価とずれる。

4. **手順4　――線部をくり返さない**
   ――線部そのものは「後」の一部。そのまま写さず「他人と結びつく機会が減り、孤立しやすくなった」と言いかえる。

5. **手順5　百二十字で組む**
   前（②）→きっかけ（③）→後のプラス（④）→後のマイナス（⑤）の順に、「～が、～。」でつなぐ。野菜・煮物・小鉢は具体例なので書かない。

要素表

要素	中身	根拠	入れる？
前	もらうと借りが生まれ、返し合いが続くことで関係が切れなかった	②	◎ 入れる
きっかけ	必要なものを店で買い、代金でその場で取引が終わるようになった	③	○ 入れる
後（プラス）	借りが残らず、負い目から自由になった	④	◎ 入れる
後（マイナス）	ものを通じて他人と結びつく機会が減り、孤立を感じやすくなった	⑤	◎ 入れる
具体例	野菜・煮物・小鉢	①	× そのまま書かない
ずれる評価	昔はよく、今は悪い	④⑥と矛盾	× 入れない

模範解答

模範解答(百二十字以内) 113字／120字以内

かつては、ものをもらうと借りが生まれ、返し合うことで人と人の関係が切れずに続いたが、店で買えば代金でその場の取引が終わるようになり、人は負い目から自由になった反面、ものを通じて他人と結びつく機会が減って孤立を感じやすくなった。

採点表

採点表(要素ごとの配点)	点
前:借りが生まれ、返し合いで関係が続いた ⇔ 後:その場で取引が終わる(対比)	4点
後のマイナス:他人と結びつく機会が減り、孤立を感じやすい	3点
後のプラス:負い目から自由になった(筆者の評価の両面)	2点
具体例を書いていない・文末が整っている	1点
合計	**10点**

減点の型(こう書くと)	何点になる？ なぜ？
「昔は野菜や煮物を交換していたが、今は店で買う。」	具体例・行為だけで、関係の変化が無い。対比の4点のうち1点。
「昔の関係はよかったが、今は孤立している。」	④段落の自由の面が無く、筆者の評価とずれる。後のプラス2点が入らない。
「ものを通じて他人とつながりつづける機会を失いつつある。」	――線部のくり返し。0点。

練習2　評論(要約)「そばにいるということ」

解き方

1. **手順1　要約の軸を決める**
   対比の軸＝「する」ケア ⇔ 「いる」ケア(R11-7)。要約は段落の順ではなく、この軸で組む。
2. **手順2　観点ごとに向かい合わせる**
   ①何をするか(④)＝困りごとを見つけて取りのぞく ⇔ そばにいる。②相手の見え方(④)＝解決されるべき問題をかかえた人 ⇔ かけがえのない一人。③続くか(⑤)＝解決できないと尽きる ⇔ 最後まで残る。
3. **手順3　具体例を外す**
   体温・薬・ベッドのわきの看護師(①②③)は具体例。③の「一人で放り出されていないと感じられる」は「いる」の働きとして一言だけ使える。
4. **手順4　筆者の結論を落とさない**
   ⑥段落「もちろん、『いる』だけでよいわけではない」。「する」を否定していない。結論＝「する」は欠かせないが、それは「いる」に支えられている。

5. 手順5　百五十字で組む

「する」の特徴→「いる」の特徴（対比）→だから根には「いる」→ただし「する」も必要で、「いる」に支えられている。

要素表

要素	中身	根拠	入れる？
「する」の中身	困りごとを見つけて取りのぞく・数えて改善できる・手当てを確実に届ける	①④	◎ 入れる
相手の見え方	する＝問題をかかえた人 ⇔ いる＝かけがえのない一人	④	◎ 入れる
続くか	する＝解決できないと尽きる ⇔ いる＝最後まで残る	⑤	◎ 入れる
結論	「する」は必要だが、「いる」に支えられている	⑥	◎ 入れる
具体例	体温・薬・ベッドのわきに座る看護師	①②③	× そのまま書かない

模範解答

模範解答（百五十字以内）　148字／150字以内

相手の困りごとを取りのぞく「する」ケアは、手当てを確実に届けるのに欠かせないが、相手を問題をかかえた人として扱い、解決できないときには尽きてしまう。一方、そばに「いる」ことは、相手をかけがえのない一人として受けとめ、最後まで残る。ゆえに「する」ケアは必要だが、つねに「いる」ことに支えられている。

採点表

採点表（要素ごとの配点）	点
「する」⇔「いる」の対比：問題をかかえた人 ⇔ かけがえのない一人	4点
続くか：解決できないと尽きる ⇔ 最後まで残る	3点
結論：「する」は必要だが「いる」に支えられている（「する」を否定しない）	2点
具体例を書いていない・文末が整っている	1点
合計	**10点**

減点の型（こう書くと）	何点になる？ なぜ？
「看護師がベッドのわきに座っていてくれたことが心に残る。」	具体例のまま。要約になっていない。0点。
「『する』ケアは必要なく、『いる』ことだけが大切だ。」	⑥段落と矛盾。結論の2点が入らず、対比の点も減る。
「する」と「いる」を別々に説明し、向かい合わせていない	観点がそろわず、対比の4点のうち2点まで。

マナビエ
MANABIE

記述の設計図　U11 まとめ・対比型（アドバンス）

© MANABIE　無断転載・複製・改変・再配布を禁じます